



同志社人物誌 (9)

山室軍平

山室民子

亡き父山室軍平が昇天したのは昭和十五年三月十三日で、本年はそれから足掛け二十五年である。このときに、彼について語る機会を与えられ、感謝している。

入信

山室軍平は明治五年に岡山県の山村で生まれた。九歳のとき同県足守町で質屋を営む親戚の養子になったが、十四歳のとき養父の意に反して上京、義絶された。東京では一活版

製造所に就職、労働の余暇に英語の夜学に通ったり、講義録を取って学んだりした。彼の周囲の風儀は好ましいものではなく、その影響を受ける危険に晒されていたとき、計らずも基督教の路傍伝道に接し、教会に出入するようになって入信した。信仰を持つと、職場の朋輩のことが心に懸り、教会に誘ったが「劇しい労働の後にあんな肩の凝る話は聞きたくない」と断られた。また、印刷物を配ると、彼らは「読んでも解らない」と言って捨

ててしまった。十七歳のとき彼は活字棚の間に伏して折った。「神様、私は弱く、愚かな者です。しかし今、身も靈魂もすべてあなたに献げますから受け入れて清め、できることなら、これらの労働者その他一般の平民の救のため働かせたまえ、どんな無学な人でも聞いて解るように福音を伝え、またどんな無知の人でも解るよう真理を書きしるす者とならせたまえ」と。神と平民のために尽す方法として、彼は昔の心学本、道話、その他、詩、歌、俳句、俚諺、比喩談等を収集、熟読して、それを伝道に用いようと努力した。彼は福音教会で、青年会幹事に選ばれ、会を振興させる一策として「国民之友」で知られた徳富蘇峰氏を招き講演会を開いた。その際、徳富氏が新島襄先生の人格について語るのを聞いて感動した軍平は、ぜひ先生の所へ行き、その感化を受けたいと思った。折りから同志社で夏期学校が開催されることを知り、無理して京都に赴いてそれに出席した。新島先生は夏期学校中しばしば顔を出されたが、語られたのは一回だけで、それも感想を述べられに過ぎなかった。「明治維新の改革は青年の手によって成された。神の国の建設もまた

青年の力に待つ所が最も多い」という意味のことを語られた。夏期学校が終ると、知己となった上級生らに招かれ、彼らと共に郷里に近い高梁へ行き、そこで伝道した。明治二十年の夏のことである。

同志社時代

九月の始めに彼は再び京都に出て同志社予備校の入学試験を受けた。その結果、課目はいずれも満点で、二百人の受験者中第一番で合格したが、授業が始まる前日、持ち合せた金が尽きた。夏期学校以来の上級の友人吉田清太郎氏は事情を知って、賄方に交渉し、彼がそこで手伝えば食事にあり付けるようにした。その上、吉田氏は授業料まで納めて下さったので、軍平は支障なく、教室に出ることができた。一年後に吉田氏は学校を去ったが、そのときになって軍平は、同氏が彼のために少なからぬ犠牲を払ったことを知り、恐縮もし、感激した。同氏は日に一回コリント前書十三章を読んでいたが、軍平を助けることがその愛の教えを実践することなのだと感じ本人には知らせずに、まず、自分の蔵書の何冊かを売って彼の授業料の一部を納めた。

残余の授業料について考慮中に、一宣教師宅から他の宣教師宅へ毎日牛乳を運ぶ仕事のあったことを知り、吉田氏は自らその仕事に従事して彼を助けたのであった。二年目からは、吉田氏のあつせんで、軍平はある篤志家から授業料を受けたが、食事の方は方針が定まらず十一日間断食したこともある。十二日目の朝祈っていると使がきて、学校の幹事が彼に面会したいとのことである。行ってみると、学校の門番をしながら勉強する学生を求めているということで、お願いして採用され、食事ができるようになった。当時の幹事は金谷充氏で、後年軍平がこの話をする、同氏は落涙して、知らずに彼を助けたことを歎かれた。新島先生は健康を害しておられたのと同じ同志社大学設立のため多忙で、学校には殆んど出られなかった。ただ先生は吉田氏を通じて「その青年にまだ若いのだから、しっかりやれ」と伝言して下さい」と言われた。軍平はそれを先生からの言葉として受け入れ「未熟なのだからしっかりやれ」という意味に理解し生涯その教えに従った。新島先生の逝去に力を落したが、先生を起した神は生きていますことと思い、彼は自ら励んだ。軍平は、学生諸

氏と計り、先生の人物や業績などについて聴く会を組織し、いろいろの人に講演を依頼し、十回ほど会を催した。それを軍平が筆記したものを後に某氏が借りて「新島先生言行録」というのを編さんした。同志社における外人の先生がたでは、新島先生を左右から助けたデビス、ラーネッド両博士を尊敬した。ゴールドン、ギュリック、コーツの諸博士。タルコット、デントンの諸女史にも敬意を表した。外部からの講演者では、フルベッキ博士、ジェーンズ大尉、マルケン博士、バックストン氏らが印象に残った。日本人の先輩では小崎弘道、浮田和民、海老名弾正、宮川経輝、横井時雄、金森通倫、市原盛宏、小野英次郎、大島正健の諸氏から教えを受けた。軍平が同志社に入ってから一、二年後に学生の中から生涯キリストのため働く約束をする者の一小団体ができた。軍平も仲間入りを希望すると「下級生だから」と反対する者もあったが、だいぶん無理をして入れて貰った。そのメンバーは宮川一男、露無文治、津下紋太郎、村井貞之助、佐々倉代七郎、武田猪平、牧野虎次、山本徳尚、伊庭菊次郎、渡辺栄太郎の諸氏で、彼らの中には、伝道や教育に従事した

人もあり、その他の方面に進んだ人も、いずれも基督教の精神をもって生きた。彼はこうしたすぐれた友を得たことを感謝した。

軍平は同志社入学当時は、極めて単純な基督教の信仰を持っていたが、それは長く続かなかった。その第一の理由は、明治二十三、四年じぶんから日本にユニテリアンの、ユニバーサリズムなどのドイツ神学が入ってきて、先輩の中にもそれに走り、伝道界を去る人もあった。彼はその方面の図書を読み、講演を聴くうちに平安を失なった。第二に、従来の基督教が、実生活に対する関心を欠いているように見えた。高遠な問題については教えても、現実の生活をおろそかにしているようである。これでは一般民衆を済度するには適当ではない。フランクリンの自叙伝に見る民衆の道徳などを考えているうちに宗教的経験が稀薄になった。第三に、社会の実状を知るにつけ、説教や講演だけでは救われない人々の多くあるのを感じた。人はパンだけで生きるものでないのは真理だが、また、パンが無くては生きる者ではない。彼は伝道よりも社会事業に傾き掛った。こうした思想上、信仰上の疑惑に加うるに物質的にも学資の不足

から来る困難のため行詰り、健康も衰え、明治二十七年六月、五年間在学した同志社を卒業を待たずに立ち去った。

救世軍に従軍

靈肉共に衰弱したが「神と平民のため」という初念は残っており、学校を出ると高梁の教会で伝道師を勤めたり、宮崎県茶臼原の岡山孤児院農業部で働いた。そのうちに、東京に伊藤為吉というクリスチャンの建築師がいて、耐震家屋を建てることを聞いた。その人の下で働けば、労働者に伝道する機会を得るであろうと伊藤氏に懇請して上京した。途中で、岡上に立寄ると石井十次氏が新しく日本へ来た救世軍を見て報告するように彼に依頼し、同氏がかねて松江のバックストン氏から貰っていた救世軍司令官への紹介状を彼に托した。救世軍について、軍平は以前、石井氏及び山本徳尚氏と共に、軍の創立者ウィリアム・ブースの名著「最暗黒の英国とその出路」という本を読み、予備知識を持っていた。

上京して伊藤氏方に落ち付くと、軍平は直ちに京橋区新富町にあった救世軍本営を訪れた。明治二十八年十月中旬のことで、救世軍

は同年九月初旬に日本へきたばかりであった。本営とはいえ間口二間ほどの二階建て木造の家屋を借り、二夫婦の英国士官が住み、その裏手の一室にテーブルを置いて事務を執っていた。司令官ライト大佐の最初の印象は良くはなかったが、帰るとき書記長官パエル中佐が軍平に贈った軍の創立者著「軍令及び軍律、兵士の巻」は彼に感銘を与えた。この本には、キリストに救われ、神の栄光と人の救のため生きる者は、いかなる品性を備え、いかなる生活を営むべきか、いかにその職業を勤め、その家庭を整うべきものか、またいかに神と人々とに奉仕し、世の救のために戦うべきかが細大漏らさずに、しかも簡潔、明瞭に教えてある。救世軍がこの本にあるような人間をつくるため存在し、またそういう目的をもって戦う軍隊であれば、将来日本の民衆を救う宗教はこれではなくてはなるまい。従って彼が知らずに探していた生命の捨て所は救世軍でなくてはならないと思った軍平は、世話になった伊藤氏の許を一カ月半ほどで辞し、救世軍に従軍した。当時、救世軍の新橋の会館では、二階で集会をするので、出席する人々は皆入口で履物を預けるため、下

足番をおいていた。軍平は救世軍で充分任務を果たし得るかどうかを憂い、自分から下足番をすることを申し出て、その役を引き受け、そこから救世軍士官候補生としての第一歩を踏み出した。以来、昇天するまで四十有余年、彼は救世軍のわが国における創立と建設に貢献し「救世軍の山室か」「山室の救世軍か」と言われるに至った。救世軍では東洋人として最初の将官、また司令官として知られた。万国指導者の会議にも再々出席し、軍の世界的行政にも発言権を持った。また、軍の最高栄誉である「創立者章」を受けた。

先駆者の道

彼の伝道や事業やその感化の範囲は、単に救世軍の内に止まらず、基督教界、一般社会にも広く及んだ。彼は講壇を重んじ、生涯の間に一万回を超える説教や講演をした。彼は基督教の真理を平明な言語で、多くの適切な例証や比喩を自由自在に用いながら、人間に対する深い愛情と理解とをもって、だれにでも解るように語った。一般民衆はもとより、知的エリートを誇る人々も喜んで彼の語る所に耳を傾けた。彼は会堂でも、街頭でも、学

校、工場、船上、刑務所等々至る所で語り、それを通して、暗黒から光明へ、世俗から清い生活へ、さらに献身の生涯に導かれた人々がどれほどあるか分らない。

彼は、わが国社会事業の先駆者の一人である。日露戦争直後に、職業紹介の事業を開始し、今日のわが国の職安制度への道を拓いた。セツルメント、身売り及び児童虐待防止、結核療養所の事業などにも先鞭を付けた。彼は娼妓の自由廃業のため、自ら文字通り鮮血を流し、後年の「売春防止法」への道を備えた。「社会鍋」は街頭募金の先駆けをした。

山室軍平は筆の人で、彼の「平民之福音」は四百九十版を重ね、わが国伝道文書中のベストセラーだと言われる。その他数十種の著書、パンフレット等がある。晩年に、彼は旧新約聖書の民衆のための講解をこころざし、旧約は創世紀からエレミヤ哀歌まで、新約はマタイ伝からエペソ書まで執筆、「民衆の聖書」として発行したが、聖書全巻の講解を完成せずに去ったのは遺憾である。

軍平は、母校である同志社を愛し、その立場からできるだけ尽くそうと心掛けた。救世軍

の大將ら指導者たちが来日すると、同志社に連れて行って彼らのメッセージを学生たちに聞かせ、同時に母校を世界に紹介した。彼自身もおりおり訪れて、講演した。彼は祈禱の人で、自分のため祈るのみならず「祈禱人名簿」を作り、その中に八百にも上る個人や団体名を記載し、それに基いて仲保の祈禱を続けた。その名簿によれば、彼は同志社のためには、特に毎日祈っていたことが明らかである。その名簿には同志社関係者の名も数多く見出される。前述のように、彼は昭和十五年三月十五日に亡くなったが同じ年の一月二十三日は、新島襄先生逝去五十年に当り、彼は先生の郷里の安中の教会に赴いて「時艱にして偉人を憶う」と題し、先生を追想する講演をしたが、それが彼の最後の講演となった。戦災のために、彼の蔵書の大部分を焼失したが、残ったものの一部と、疎開しておいて難をまぬがれた彼の原稿、説教や講演の筋書、彼の手記などの一部とを先般同志社に送り、保管するとともに、研究者の参考に供して頂くことになった。現在、旧神学館に「山室軍平文庫」として納められている。

(東京都社会教育委員・救世軍中佐)